

## 週刊メッセージ “ユナタン” 12

～ こどもの風景 ②：～ （一旦休止）

平成 27 年 12 月 16 日 片山喜章

この週刊メッセージ “ユナタン” は、今回で、一旦、休止します。（2月末再開予定）。

各園、“ユナタン”の読み合わせと学習会を定期的にして具体化に努めています。でなければ、この内容が、イツワリになります。各園は、今まさに発表会に向けて、職員集団が一丸となって取り組もうとしています。ですから、学習会も一時ストップです。なので、一旦休止します。

今回は、“イケナイコト” “イカスコト” をした乳児とそれに関わった保育者のお話です。

### #2 「叱ると怒る」 （#1は、先週の「かごめかごめ」でした）

i. 2歳児のAくんが、突然、積木を投げました。他の子どもにあたりそうになりました。

それを見たB保育士は怒って、Aくんを部屋の外につれだして、きつねの眼になってこんこんと諭しました。Aくんは泣き出します。そして、そこに居合わせたC保育士に助けを求めようとくっつきました。先輩であるB保育士は「抱っこしないで、今、叱っているのだから」と厳しい表情で伝えます。C保育士は自分が叱られているような気持ちになり、その場を離れました。

「積木を投げた意味や理由を様々な背景から洞察すること」が必要な場面ですが、その後またAくんは、C保育士のところにやってきて抱っこを求めました。C保育士は戸惑います……。

ii. 同じAくんが、また同じことをしたとき、D保育士は「だめ！」と一喝し、意図して、きつねの眼から徐々にねこの眼に変えました。緊張していたAくんはその変化に気づきます。

そこへまた、C保育士がやってきました。D保育士は、Aくん「C先生とあっちで遊んでおいで」と語気を強めて促しました。C保育士は、どう対応しようかと思案しながら、Aくんの手を引いて、布ボールのある棚の方に行きました。自分がAくんを諭すのはおかしいし、「積木の代わりにボールを投げようね」と諭すのも、ベタな対処法です。そこで自分が布ボールを持って、自分で的当てをして遊ぶことにしました。Aくんは、新任のC先生のけなげな振る舞いを察したのか、やさしさを発揮してC保育士と布ボール投げをします。遊んであげているようでした。

iii. そのAくんが、D保育士のところに戻ってきたとき、一瞬視線がぶつかり、D保育士は満面の笑顔を返しました。すると、Aくんの表情は一気に和らいで、そのままさっき積木を投げた場所にもどって友達と穏やかに遊び始めました。：：：子どもを叱る、諭すという営み（行為）は、最もむずかしいと言えます。自分自身の怒りの感情を吐露しても「叱っている」と正当化する大人たちが至るところに居ます。D保育士は新人のC保育士と協同？して「説明しがたい複雑な手法」で、Aくんに何かを感じさせ、Aくんは気持ちを和らげたと私は理解できました。

### #3「サーキット運動」(指導性は、よく観察し、子どもの興味関心を探ること)

i. 乳児のサーキット運動は法人全体の定番活動です。しかし、幼児と違ってたくさんの遊具を周回コースに設定するだけでは機能しないのです。そこに保育者の熱意や探究心が充満していなければ、興味は薄れて散漫な状態になります。A園には、サーキット専用の部屋があって、乳児はそこで毎日、楽しんでます。BGMの曲順も決まっています、関西は“♪ぞうさん”、関東は“♪きらきらぼし”がかかると“自主的”にお部屋にかえるという習慣が定着しています。

ii. そのA園において、すぐに散漫になり、周回コースを外れる子どもの姿がかなり見られました。担任が戸惑うところです。コースを外れても、その子の自主性に基づいた行動ですから、あっちへ行ってこっちに来てという誘いは、“自主性を尊重しない”と考えられるからです。

翌日、自他ともに「サーキットの神様」と認める(薄笑)私が設定し、その時間中ずっとその場に居るだけで、個々の子どもの自主性はコースを周回するという行為に現れました。

担任は、うっとりした表情で私を見つめて問いました。「なんでえ〜?」と。(その理由は?)

iii. 釣り人が2人、同じ場所に並んで釣りをすると、初心者と名人とでは釣れる魚の量も大きさも違います。きっと名人が発するパワーが釣り糸を伝って海中の魚を引き寄せられるのでしょう。それと同じです。法人の“めざすべき保育者像”の1つとして「エンターテイナー」であれ、と書かれています。「環境」を設定するセンスと洞察、そこに居る保育者の「エネルギー」が絶妙に絡まって、子どもの自主性に方向をあたえろと考えます。子どもの興味を読みとろうと、意識を集中させてコース設定した私の存在が、1歳児全児の自発性を引き出して方向づけたのです。

iv. 室内の大きな窓には普段カーテンをしています。外の景色が1歳児の子どもの興味を奪わないように遮っているのです。しかしその次の日、カーテンは開いたままでした。数人の子どもが窓際に設定された台に登ったまま生き生きとした表情で外を眺めています。好奇心の現れです。

しかし運動量を保障し、多彩な動きを通して身体機能を高める「サーキットの時間」ですから、ここで「もうおしまいにしようね〜」と諭して、カーテンを閉めてしまうのが常套手段です。

担任が急いで閉めようとした時、「サーキットの神様」は外の景色より魅力的な遊具設定を思案していました。台に登る部分に踏切板を取り付けて登りの傾斜をつける。そして降りるところを階段状にして降りやすくする。結果はズバリの中心! 台に上がるのに斜面を登る脚力を発揮できる魅力、降りる際は容易く降りられる心地良さ、そんなふうに環境を変えると興味や自発性の方向も変わり、カーテンを閉めなくても、外の景色に打ち克つ魅力あるコースになりました。

乳児保育は観察が大事です。よく観察=洞察するだけで、子どもに力が宿ると考えます。全身をアンテナにして関わり方や環境をクリエイトする、そんな名人を私たちは、めざしています。